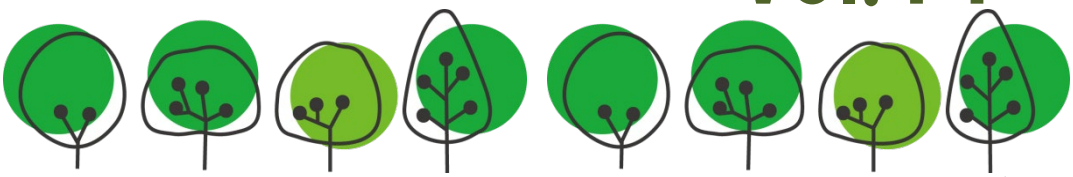
木地師のふるさと

vol.11



R5．１発行

木地師と漆ー未来を紡ぐ伝統文化

東京国立博物館で公開シンポジウムを開催！

９月18日に東京上野にある東京国立博物館にて、「木地師のふるさと東近江市」を全国に発信するとともに、全国の木地師文化に関する地域や関係団体、関係者との連携を一層強化することを目的とし、東近江市主催の公開シンポジウム「木地師と漆ー未来を紡ぐ伝統文化」を開催しました。

大型の台風の接近に伴い、豪雨の中での開催でしたが、関東近郊の方を中心に約160名にご参加いただきました。今号ではその様子をお伝えします。

当日プログラム

開会挨拶　小椋　正清（東近江市長）

基調講演

「日本の基層文化としての漆芸」

三田村　有純さん（東京藝術大学名誉教授）

パネルディスカッション

［パネリスト］

三田村　有純さん（東京藝術大学名誉教授）

土田　直さん（日本漆器協同組合連合会理事長）

萩原　誠司さん（美作市長）

須藤　護さん（龍谷大学名誉教授）

小椋　正清（東近江市長）

［コーディネーター］

筒井　正（東近江市参与）

ロビーでのタペストリーの展示

基調講演「日本の基層文化としての漆芸」

東京藝術大学名誉教授で、日展理事を務める三田村有純さんに「日本の基層文化としての漆芸」と題し、漆文化と日本の歴史や食文化等との関わりについてお話しいただきました。

日本の歴史と漆文化

三田村有純さん
1949 東京都杉並区生まれ
東京藝術大学名誉教授、漆芸家三田村家三代目、江戸蒔絵赤塚派十代目
2018 日本藝術院賞 他受賞歴多数

様々な素材は漆をまとうことで、永遠に残るものになります。それが漆です。

日本は古来より豊かなものづくりの地でありました。これは四季折々の豊かな自然に恵まれ、食料を得るために多くの時間をかける必要がなかったためにその時間をつかい、工夫をこらしたものづくりが展開できたのです。

縄文時代をみると、草創期から晩期まで、地層から漆の遺物が出てきます。造形、絵、塗料、接着剤など様々な形で漆が使われ、漆と切っても切り離せない文化が形成されていました。

弥生時代から平安初期頃までは、大陸から入ってきた中国系の文化の影響を強く受け、漆文化は薄くなっていきます。

遣唐使が廃止された時期、再び日本の文化が創造されます。中国系の文化のひとつに「漢字」がありますが、日本人はその漢字から平仮名と片仮名をつくり、自身の喋っていた言葉を文字として自由に書くこととなり、日本の文学が始まりました。

平安から桃山までは、再度日本が広く大陸と交流をした時代です。ポルトガルやスペインに漆器などが売れ、さまざまな新しい文化が入ってきます。そして江戸時代に、徳川幕府が「鎖国令」を出して、再び日本は国を閉じました。閉じている間の 260 年間、戦争しない平和な時代に職人たちは、ものづくりに励んでいたわけです。

開国してたった 5 年目で、品川から横浜までの蒸気機関車が走りました。鉄道や軍備を買うことができたのは、江戸時代に文化が醸成され、各地でつくられた蒔絵、織物、陶磁器などの工芸品がヨーロッパに売れたからです。日本はものづくりで列強の仲間入りをしたとも言えます。

基調講演の様子

食文化と漆文化

日本人はなぜ「いただきます」というのか。それはあなたの命を私の命のためにいただくという意味です。

では、なぜ箸は横に置くのか。器に入った命と私との結界を表すからです。箸を取り上げたとき命同士が初めてドッキングします。この食文化は日本独自のものです。

漆や箸の文化は中国からもたらされたとも言われますが、中国語で漆は「チー」、箸は「チョ」と発音します。もし、日本になく中国からもたらされたものであれば、中国語の発音に近いものになるのではないでしょうか。

「うるし」と「はし」の語源をたどると、「うるし」の語源は、ぬれた状態を表す「うる」と「し」になります。「し」は、騒がしいときに「シー」というように、止まりなさい、固まりなさいという意味です。一方、「はし」の「は」という言葉は端（は）を表します。端というのは最先端にあって物事のエネルギーを取り入れるものを表します。「は」と「し」がくっついて「はし」という言葉になります。同音の「橋」はこちらと向こうをつなぎます。「箸」は命と命をつなぐものです。

音読みは中国の思想、文化ですが、日本人の文化の中には、それだけでは捉えきれないものがあります。ときには、日本の話し言葉である訓読みの中で考え、日本文化を捉えることが大事ではないでしょうか。

パネルディスカッション

ご講演いただいた三田村有純さんに加え、日本漆器協同組合連合会理事長の土田直さん、山口県美作市の萩原誠司市長、龍谷大学名誉教授の須藤護さんにご登壇いただき、小椋正清東近江市長と漆文化・木地師文化の重要性と課題、今後の展望についてお話いただきました。

テーマ１「木を守り、育てる文化」

須藤名誉教授

須藤名誉教授：日本人は木の文化を育ててきた人々だとよく言われます。その理由にはいくつか条件があると考えています。まず、日本が非常に豊かな森林資源に恵まれ、四季に恵まれた国であること。次に、古い時代から木を加工する技術があり、その技術が一般化したこと。そして、その技術により制作されたさまざまな木製品を日常的な道具類として使いこなし、豊かな暮らしをつくりあげたこと。このような条件から、木の文化が育ってきたのではないかと考えています。

萩原市長

萩原市長：私の曽祖父は木地師の村の出でもあり、この場に呼んでいただいたと思います。近年日本では「森林経営管理法」の制定や関連の税制改正が実施されました。簡単にいうと、森林の管理者が充分に管理できない場合、その森林がある市町村が代わりに管理することや都市部に対して木材の利用を要請するような仕組みがつくられています。山の文化を守る担い手として市町村が登場してきたといえます。

テーマ２「木地師文化の直面する課題」

小椋市長

小椋市長：昭和 40 年前後の「エネルギー革命」による森林資源に頼らない生活への変化で、生業としての木地師は一層厳しくなるとともに、人口減少による伝統の継承を巡る問題にも直面しています。コロナ禍後の社会は、お金ではなく、居心地の良さや幸せ感が豊かさの指標になるのではないか、そのような豊かさを形作るものは木の文化・森の文化ではないかと考えています。

土田理事長

土田理事長：漆器産地の課題は、やはり後継者問題です。産地や職人の取組だけではなかなか解消されません。越前では、商工会議所や市、大学の産官学の連携によりインターンシップの受入れや職人を目指す研修生に県や市から研修手当等の生活支援が実施されています。この制度により「体験→研修→就職」の流れが続き、現在多くの方が職人として従事しています。

テーマ３「木を守り、育てる文化を後世に伝えるために、いまできること」

パネルディスカッションの様子

萩原市長：成人式の記念品はすべて木地師に製作してもらっています。また、古民家再生を進めており、展示施設ではなく、宿泊、木地や漆製品を使った飲食、体験が可能な場所にしたいと考えています。

土田理事長：大学との連携による商品開発も進めており、海外での展示会も開催しています。そうした取組を通じて若手の女性職人の就業にもつながっており、新しいアイデアで家庭で使える商品の開発も行われています。

三田村名誉教授：漆には日本人のわび・さびの心に通ずる趣や高い抗ウイルス・抗菌性などの力があります。木の文化を守るため、ぜひ今日からでも木地製品・漆製品を使い、その魅力の語り部となってください。

会場からの質問

パネリストとしてご登壇いただいた方々に、会場にお越しの皆様からの質問にお答えいただきました。

質問１：ろくろを使った木工製品は、日本以外にはないのですか。

須藤名誉教授：日本以外でも、中国、韓国、ネパール、東南アジアなどでろくろを使った多様な木地製品がつくられており、中国、韓国では漆器も製作しています。

質問への回答の様子

質問２：まったく漆文化を知らない子どもに漆文化とは何か説明するとしたら、どうお答えになりますか。

小椋市長：簡単にいうと、究極の循環型の資源です。漆や木は、生分解性のため土に戻り、その土が栄養になって、それが木をまた育てます。また、木は燃料でもあり、CO2 の排出量が少ないエネルギーです。森林は心も穏やかにします。

木の文化について子どものときからしっかりと理解する、教えていく必要があると思っています。これからは森の文化を日常の中に取り入れていくことを目指していくべきと考えます。

質問３：漆はいつの時代にも常に貴重で高価なものであったと思っています。そのような認識でよろしいでしょうか。

土田理事長：漆は、５年成長したウルシの木から牛乳瓶一本分しか採れません。ものすごく貴重だと思います。

漆の後始末などの際も「本当にきれいに取らないといけないよ」と、職人にも厳しく教育をしています。

越前漆器協同組合では、いま年間 1000 本ずつ植樹をして、１万本の漆を植えていこうという運動を行っています。

会場の様子

全国漆器展・「ここ滋賀」での作品展示

全国漆器展での展示

「ここ滋賀」での展示

本シンポジウムに特別協賛していただいた全国漆器展（東京・赤坂）及び、滋賀県のアンテナショップ「ここ滋賀」（東京・日本橋）にて、「木地師のふるさと東近江市」の展示を行いました。

木地師のふるさと　東近江市

発行：東近江市企画部企画課
〒527-8527　滋賀県東近江市八日市緑町 10 番 5 号
TEL（代表）0748-24-1234　（直通）0748-24-5610
FAX　0748-24-1457
Email　kikaku@city.higashiomi.lg.jp
Facebook　https://www.facebook.com/higashioumi.kijishi
（Facebook では随時、お知らせ等を行っています！！）

市 HP　Facebook